

主 題：信仰の成人

聖書箇所：エペソ人への手紙 4章11－15節

神は私たちクリスチャンにどのようなことを望んでおられるのでしょうか？どんなことを私たちに期待しておられるのでしょうか？私たちはいろいろなことを学んできました。今一度私たちが覚えたいことは、神は私たちクリスチャンがその信仰において成長することを望んでおられるということです。そこで私たちが自らに問い掛けなければいけないことは、神はそのように望んでおられるけれど、私たちがそのことを望んでいるかどうかです。私たちが本当に神の前に「神さま、私はもっと信仰において成長したい」という思いをもって歩んでいるかどうか、そのことを問い掛けなければなりません。よくスポーツで勝利をした人々、また実際に試合をしているときの解説者の話で、このようなことを耳にすることがあります。「勝利をする者は勝ちたいという思いが強い方です。」と。勝ちたいという思いが強いほどそのゴールに向かって進んで行けるのだと言います。私たちの信仰生活においても同じことが言えます。私たち一人ひとりが「私は成長したい！」という思いをどれだけ強くもっているかです。イギリスの作家、ジョージ・エリオットはこのように言っています。「成長に関して最も重要な原則はその人の選択にかかっている」と。信仰が成長することは不可能なことではありません。無理なことを神は言われていない、可能なことを言われているのです。私たちの信仰は間違いなく成長して行くのです。私たちが今考えなければいけないことは、どうすれば成長するのか、そのことをこれから見て行くのですが、それ以上に、私は成長したいのかどうかということです。信仰の成長の方法について、いくつかのことを今からこのエペソ4章から学んで行きます。私たちの信仰はどのように成長するのでしょうか？

まず、私たちは神が私たちの信仰が成長するためにすばらしいみわざを成してくださったということをおのみことばは教えます。どんなすばらしいみわざを神が成してくださり、それを通して私たちが成長することをどれほど神は強く望んでおられるかをごいっしょに見て行きましょう。

☆私たちの信仰成長の方法 7、11－12節

1. 神は賜物を私たち個人に与えられた

神は特別な賜物をイエス・キリストを信じる一人ひとりに与えてくださったのです。4：7を見てください。「しかし、私たちはひとりひとり、キリストの賜物の量りに従って恵みを与えられました。」とあります。

「私たちはひとりひとり」とはクリスチャンを指します。イエスを信じ救いにあずかったすべての人例外なくということです。そして、この「賜物」というのはイエスを信じたときに信じた人に神が与えてくださるものです。この賜物は神に属するものです。神の所有です。ですから、「キリストの賜物」と言っているのです。持ち主は神なのです。賜物の中にはいろいろなものがあります。もうすでに無くなった賜物もたくさんあるのですが、たとえば預言、奉仕、教えること、助けること、勧めをなすこと、いろいろなものを分け与えること、指導することなどとリストは続きます。今皆さんにお話したいこと、そしてもう私たちが何度も霊的な賜物について学んできたことですが、今大切なことは自分がどんな賜物をもっているのかと一生懸命探って、それが分かったら奉仕をしましょう、ではないのです。分かっているからといって、イエス・キリストを信じた私には神が特別な賜物をくださっているということです。だから、その賜物が何であるかが分からなくても、私たちは働きを始めて行くことです。働きを始めて行くことによって、自分に与えられている賜物がどういうものかを自分も気付くし、周りの人からそれを示されることもあるのです。神がご自身の意志によってその賜物を私に分け与えてくださったのです。でも、神は賜物だけを私たちに与えてくださったわけではありません。

7節には続いて「恵みを与えられました。」とあります。「恵み」ということばは神の力、ダイナマイトということばです。つまり、神は私たちに賜物をくださったのですが、それだけで終わったわけではありません。その賜物を実際に生かして生きて行くことができるように、主に仕えて行くことができるように、実践する力さえも神は備えてくださり、私たちに与えてくださったのです。だから、イエスを信じている者は与えられた賜物を用いて、主に仕えて行くことが可能なのです。そのことをこのみことばは私たちに教えてくれるのです。ですから、私たちは自分の年齢や健康状態や自分が受けた教育とか訓練とか、置かれている状況、忙しさなど、そのようなものに関係なく、神は私たちを用いてくださるのです。いろいろな人を通して私たちはそれを学んできました。高齢者の中で一生懸命主に仕えておられる方がいます。病の床にあって一生懸命主に仕えておられる方がいます。彼らが私たちに教えることは、信仰生活の歩みにおいて引退はない、定年はないということです。私たちの教会を始められたあのエストライク先生は、日本での働きに一応ピリオドを打たれてアメリカに帰られました。クリスチャンと

しての働きは終わっていなかったのです。今お住まいのところでは、引退後の牧師、宣教師がたくさん住んでおられます。そこで先生は手が必要な人の所について植木の手入れをしたり、教える賜物を用いて人々が集まるところで神のみことばを伝えて励ましを与えたり、中にある病院を訪問してそこで多くの人を励ましている、機会があればみことばを伝えて神を証している、困っている人を助けておられるのです。そうして見ると、クリスチャンには引退はないのです。天に行くまで皆現役です。いろいろな理由をつけて引退しようとするのは私たちです。「できない」というのは私たちです。でも、聖書を見ると、神が「ダメです。無理です。用いられません。」と教えている箇所はどこにもありません。地上に置いてくださっている以上、神はあなたを使ってくださいなのです。だから、私たちがしなければいけないことは、いろいろな言い訳を止めることです。そして、神が望んでおられるように「使ってください」と言うことです。そのときに神は私たちをお使いになるのです。なぜなら、神はあなたに特別な賜物を与えてくださった、それは神があなたを用いてくださるからです。私たちは言うかもしれない、私にはいろいろな問題があります、弱さがあります、忙しすぎますと、神はそれらのことをすべてご存じです。神がもっと望んでおられることは、そのような中にあっても私たちが心から「主よ、私はあなたに仕えて行きたいです」という心からの願い、選択なのです。神は私たちがどのような状況にいるのかをご存じです。確かに体が悪くなると自由が無くなるかも知れません。しかしどのような中でも、私は神に生かされているから、特別な賜物が与えられているから、どうぞ私を使ってくださいという、そのような態度をもって歩んで行くことを神は期待しておられるのです。私たちが成長するために神は特別な賜物を与えてくださったのです。

2. 神は賜物を教会に与えてくださっている

1 1 節から見てください。「こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。：12 それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、」とあります。つまり、ここに記されているこういう働き人というのは、神が教会に与えた贈り物だと言います。確かに、教会の歴史を振り返って行くと、教会が誕生して行くときに神は1 2使徒をお用いになりました。教会の基礎が敷かれた後は1 2使徒、預言者の働きは必要でなくなりました。次は伝道者がいました。一つの教会に留まるのではなく、あちこちに出て行ってキリストの福音を宣べ伝える人々が神によって起こされてきました。そして、各教会を牧する牧師、教師が与えられてきました。このみことばを見たとき、神はそのような働き人を教会に贈り物として贈っていると言うのです。何のためでしょう？それは1 2節にあるように「**聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせる**」ためです。「**聖徒たちを**」、つまり、クリスチャンたちを整えるためです。この「**整える**」ということばは、外科で骨折した手足を固定するとか、はずれた関節を元の場所にはめ込むとか、そのような場合に用いられることばです。つまり、正しい所に戻すのです。このような働きをこの働き人たちは為すのだと言います。教会の人々が正しく歩んで行くように、はずれて行かないように、正しい方向に向かって進んで行くことができるように、その働きを為すために与えられた者たちだと言っているのです。ですから、彼らは教会にあって教会員の人々、クリスチャンを訓練して、彼らが正しく歩んで行くように、しかも、彼らが奉仕の働きを為して行くように訓練して行くのです。だから、私たち牧師はみことばの教えということに時間を割かなければならないのです。これが私たち牧師・教師に与えられた一番大きな責任です。みことばをもって教会の皆さんを、イエスを信じておられる皆さんを養って行くのです。そうすることによって教会の皆さんが働きを為して行くためです。

すべてのクリスチャンは例外なくキリストのために為す働きがあるのです。みことばを聞き、そのみことばによって神のみこころが教えられ、そして、それに従って行こうとする、そうすることによって、この1 2節にあるように「**キリストのからだを建て上げるため**」、つまり、全体が成長して行くことを教えるのです。ですから、神は私たちに特別な賜物をくださった、ということは、私たちがその賜物を用いて主に仕えて行くことによって私たちは成長するのです。神は教会に働き人を贈られました。その働き人がみことばを語ることによって私たち皆が成長して行く、正しく歩んで行く、正しく歩むなら当然、私たちは与えられた賜物を用いて主に仕えて行こうとします。そして、そのような歩みを為して行くときに、あなたの信仰が成長するだけでなく、教会全体が成長して行くのです。そうすると私たちは、私一人くらい何もしなくても構わない、礼拝に来てそれだけで十分、ともし思っているなら、それは聖書が教えていることとは違うのです。神はあなたを使おうとしておられるのです。あなたが「分かりました、どうぞ私を使ってください」と言わない限り、あなたの信仰の成長はないし、あなたがそのように歩まない限り、教会全体が成長しないのです。私たちクリスチャンは大きな責任を持っているのです。

3. 成長して行く助けを個人に与えてくださっている

1 6 節に「**キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分はその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられる**

のです。」と記されています。何のことでしょう？からだの事です。健康なからだというのは、栄養が全体に行き渡ります。そのためにはからだのどこかの部分が、たとえば、骨が折れていたり関節がはずれていたりすると問題です。神は教会がしっかり一つになって、健康な状態になって、全体が成長して行くようにわざを為されると言うのです。このように神は私たちが成長するようにすべてのことをしてくださったのです。でも、大切なことが一つ残っています。私たちがそれをする事、私たちの選択です。16節のみことばを見てください。「**キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により…成長して、愛のうちに建てられるのです。**」とあります。「**一つ一つの部分が**」とはすべての救われているクリスチャンの事です。あなたが「**その力量にふさわしく働く力により**」何が起こるのでしょうか？「**成長して、愛のうちに建てられる**」のです。そこに成長が見られるのです。だから、先ほどから見てるように、あなたの信仰が成長するために必要なことは、あなたが主に仕えて行くことです。あなたに与えられた賜物を用いて主に仕えて行くことです。ですから、教会に来て、礼拝に来て、それだけだったらなかなか信仰は成長しないのです。また、礼拝を何かのことで休み、みことばを聞くことがなければ、ますますあなたの信仰は成長して行かないのです。なぜなら、私たちはみことばを聞いて神のみこころを知る、それ以外にどのようにして成長して行くのでしょうか？霊の糧であるならみことばを聞かなければなりません。そして、みことばを聞いて神のみこころが示された私たちには、当然責任が生まれて来るのです。それに従って生きて行くのかどうかです。そうして私たちの信仰が成長して行くのです。信仰の成長に関しては神がすべてのことをしてくださった、残っているのは私が「主よ、成長したいです、私はもっともっとあなたが喜んでくださる者になって行きたいです」との願いをもって、そのように選択して神に従って行くこと、その選択をするかどうかです。そこが一番大切だと言うのです。でも、私たちの多くは「それは分かるけれども…」と言って、その後いろいろな言い訳が続くのです。その人が言っていることは「私は成長したくない」です。満足です、今のままで十分ですということです。それがいかに悲惨かということをおあなたはもうご存じのはずです。なぜなら、あなたが成長を望まなければあなた自身のうちに祝福はないから、いろいろな不安をもって生きて行かなければならないし、いろいろな悩みを抱えながら生きて行かなければならないし、救われていると言いながら、神が与えてくださる希望をもって歩んで行くことも、その間違った選択が台無しにしてしまうのです。今、みことばを見て明らかでした。神はあなたに何を望んでおられるのか、期待しておられるのか、信仰が成長することです。そして、どのようにすれば成長するのか教えてくださっているのです。私たちがそのことを望まなければいけないのです。そのときに神は働いてくださるのです。だから、信仰の成長を妨げているのはあなた自身の罪なのです。正しい選択をする者のうちに神は働き変えていってくださるのです。信仰の成長は可能です。私たちがそれを望むなら…。

さて、この13-15節を見たときに「どうすれば成長するのか」だけでなく、成長した者とはどのような人なのか、そのこともパウロは教えているのです。

☆信仰の成人とはどのような人なのか？ 13-15節

信仰の成人、信仰のおとな、霊的な人とはどのような人なのか、パウロはこの箇所でお話してくれられます。いくつかの事を見て行きます。13節に「**ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致に達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。**」、「**完全におとなになって、**」とあります。14節には「**子どもではなくて**」とあり、信仰のおとなもいるし、信仰の子どももいるのです。ですから、信仰のおとなとはこのような人だと教えています。

1. どんなときにも主を信頼する人

パウロは「**信仰の一致と神の御子に関する知識の一致**」と言いました。ここで言われている「知識」というのは、どれだけのことを知っているか、頭でどれだけのことを理解したか、とそのようなことではなく、私たちが日々の生活を通して体験したこと、確信したことによって知って行く、そのことを言っているのです。私たちは信仰生活を通していろいろなことを学んで行きます。聖書を読んで神はこんなことを教えていると学びますが、日々の生活を通してそれを体験して行くことがあります。たとえば、神はどんなときにも平安を与えてくださる、とあります。問題がなければ私たちは「そうだ」と言います。ところが、いろいろな状況の中に置かれた人の証を私たちは聞いてきました、病の床にいる人、死の床にいる人、また家族を失った人の証、彼らが言うことは「主は私に平安をくださった」と。そのとき、私たちは頭で聞いていたこと、理解していたことが、そのような状況を通して「なるほど、神はほんとうにそのようなお方だ」と確信を強めて行くのです。神は必要を与えてくださる、と言われます。皆知っています。しかし、仕事を失ったときに私たちは「でも、神は必要を与えてくださる」という約束に立ちます。そして、神が与えてくださったことを聞くときに私たちは大きな励ましを受けるのです。知らなかったことを聞いたのではなく、知らなかったことを学んだのでもありません。知っていたことを

より強い確信をもって受け入れることができたのです。このようにして私たちの信仰はただの知識から確信へと変わって行くのです。そのことを言っているのです。ですから、霊的なおとな、信仰のおとなというのは、どんな状況にあっても神をしっかり信頼して行こう、そういう人です。実生活を通して、神はこういうことをなさり、このようなお方だから私は信頼するのだと、それが霊的な人なのです。信仰のおとななのです。そういう人に神はあなたを変えて行こうとするのです。あなたが望むなら、です。だから、クリスチャンが集まったときにつまらない話に時間を過ごしても何の徳にもなりません。神はどんなにすばらしいお方なのか、その話をするのです。そうすれば私たち自身の信仰は励まされて行きます。皆、いろいろなことを経験しているはずで、ある時は、実はこのような問題を抱えて今必死になって祈っているから、いっしょに祈って！とそれを分かち合うことができます。そうすれば、神のみわざをともに見ることによって、主をともに誉め称えることができます。そのようにして私たちは確信を得て行きます。

2. キリストのかおりを放つ人

13節の後半に「**キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。**」とあります。私たちイエス・キリストを信じた者を、神は何のためにこの世に置いてくださっているのでしょうか？それは、このすばらしい救い主を明らかにするためです。こんな神がいるのだ、ここに救いがあるのだということを私たちは明らかにして行くのです。どのようにそれをするのでしょうか？もちろん、ことばをもってすることは知っています。大胆にイエス・キリストの福音を語っていくことが必要です。しかし、このみことばを見ると、「**キリストの満ち満ちた身たけにまで達するため**」と、これは私たちクリスチャンがキリストに似た者に変えられて行くことによって、ということなのです。それによって私たちのうちにいて、私たちを変えて行ってくくださる神のすばらしさが世に明らかにされて行くということです。パウロはⅡコリント3：18で「**私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。**」と言っています。私たちが光を放っているわけではありません。私たちは神の光を反射させるだけです。神とはどんなにすばらしい方なのかを人々に明らかにして行くのです。そのために私たちは救われ生かされているのです。鏡のような存在だと言うのです。そのものを写すのです。私たちが神のすばらしさ、イエス・キリストのすばらしさを、私たちが鏡のような役割によって反映して行くのです。そうして人々は私たちのうちにいる神のすばらしさを見て行くのです。だから、パウロは言うのです。「**これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。**」と、神がこのような働きを私たちを通して為して行こうとしているのです。私たちは、そのような者に私を変えて行ってくください、私を通してあなたのすばらしさが証されて行くようにと願うことです。私たちのうちに与えられた聖霊なる神は私たちを変えようと働かれます。神がみことばをくださったのは、私たちの歩む方向を示してくくださるためです。そして、その方向に私たちが歩んで行くとき、私たちはキリストに似た者に変えられて行くのです。聖霊なる神に私を変えていただく、その働きをゆだねて行くかどうか、神はそのようにしようとすべてのことを備えてくださった、でも、それを邪魔するのは私たちの罪です。それが私たちの成長を妨げるのです。私たちがすることは、どうぞ私を変えて行ってくください、あなたのすばらしいかおりを放つ者に変えて行ってくくださいと願うことです。

3. 誤りを見分けることができる人

14節を見ると「**それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもてあそばれたりすることがなく、**」とあります。この当てもそうでしたが、いろいろな間違った教えが教会の中に入ってきます。信仰が弱ければそれに惑わされてしまいます。ある教えを聞くとその方へ走って行くし、また別の教えを聞くとそっちの方へ走って行く、根無し草のような、まさにそれは信仰が弱いからです。信仰が強い人はいろいろな教えがあってもそれを見て、これは神の前に正しいのかどうか判断できるのです。それが神の教えなのか、この世の教えなのかを見分けることができます。コロサイの教会もいろいろな問題を抱えていました。神のことば以外のことを教える人々が入り込んで来ました。たとえば、飲食に関して、何を飲み何を食べるのかとか、祭りや新月、安息日に関して、こういうことを守るべきだと教える人々がいたのです。彼らはこう言うのです。こういう食べ物を食べないこと、こういう物を飲まないことが信仰的な人です、こういう日を守る人が信仰的な人ですと。それによって彼らは霊性を判断したのです。でも、パウロは食べ物飲み物に関してどのように教えているのでしょうか？皆さんよくご存じのことです。Ⅰコリント10：31「**こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい。**」と、私たちが考えるべきことは私たちのすることが神の栄光を現わすのかどうかです。しかし、人々はある特定の行為を厳守することによって霊的であるかどうかを判断しようとしたのです。また、割礼を受けなければいけない、信仰だけでは不十分だと言います。また、哲学などいろいろな教えが教会の中に入って来た、それらに共通していることは、イエスが語られた福音だけでは不十分だということです。もっと知識が

必要だとか、もっと世の中の特別な知恵や教訓が必要であるというのです。このようなことが教会に起こったとき、パウロは「注意しなさい、見極めるように」と言います。そのために教会にリーダーが立てられたのです。なぜなら、教会の霊的なリーダーはそれが聖書的な教えなのか、世の中の教えなのかを判断できる人だからです。知らず知らずのうちに教会にもいろいろな世的な考えが入ってきます。世の中の「成功」というその基準が教会に入ってきてしまう可能性があります。そうすると、教会は建物の大きさであったり、人数であったり、プログラムによって祝福されている、されていないを判断しようとし、聖書はそのようなことを教えていません。神に従順な200人よりも、神に従順な50人がいるほうが神に祝われます。

また、その教えが神に喜ばれるかどうかを判断できるのです。それは神のおことばによって判断するのです。ですから、私たちは常にみことばに戻って、これに関してみことばは何と教えているのかと、判断して行くのです。そして、それができる人が霊的な人なのです。世の知恵によって判断して行くことは非常に危険なことです。みことばが私たちに教えることは、霊的な人はそれが神の教えかそうでないかを正しく判断できる人だということです。

4. 真理に従う人

15節に「**むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。**」とあります。「**愛をもって真理を語り**」と、神のメッセージを正しく語る事ができる人です。同時に、この「**語り**」ということばは「行ないとともに生きる」とも訳されることばです。ですから、パウロがここで言っていることは、そのように語るだけではない、真理に従って生きることです。そのときに彼は「愛」を忘れてはいけないと言います。愛を忘れてしまうと私たちはすぐにパリサイ人となってしまいます。私はこれだけの働きをしているけれどあの人は何もしていないと、そのように人を見始めると人をさばき始めることになります。だから、「愛」ということばがここにあるのです。私たちが個人として、神の真実を語り、神の真理であるみことばに従って生きて行くのです。そのときに私たちが覚えておかなければいけないことは、私は主のためにしているのだということです。だから、私たちがある働きを成し終えたとき、私が頑張ったのではなく、神の恵みによってさせていただいた、神のあわれみによってさせていただいたのです、感謝ですと、そのような人は決して人をさばこうとはしないのです。愛をもって真理を語り、真理を實踐して行くようにと教えるのです。

私たちは今日、成長した人がどのような人なのか四つのことを見て来ました。神はこのような人に私たちを変えようとしてくださっているのです。あなたはそのことを望むことです。今の私に満足していません、もっと成長させてください、そして、もっと用いてくださいと願うのです。これは神が望んでおられることです。それなら、私たちはそのように望んでそれに従って行くかどうか、私が選択しなければいけないことです。神は私のような者を使ってくださるのです、無条件で。ですから、私たちも条件を付けずに「どうぞここに私がいますから私を使ってください、どのように使ってくださるのか私は期待します」と、このような信仰者になりたいものです。神は私たちのような者をこの世にあって、神のすばらしい証し人として用いてくださるのです。信仰の成人となることを目指して歩んで行きましょう。